

カラクムルにおける「王朝交替」について

－「蛇頭」紋章文字と「コウモリ」紋章文字－

佐藤 孝裕

1、はじめに

私は、2年前に『史学論叢』第36号に、「蛇の王国」カラクムルー古典期マヤ社会のパワー・ポリティクス」と題する小論を発表した。この小論では、古典期マヤ社会をティカルTikalと二分する「超大国」であったカラクムルCalakmul王国の歴史を、歴代の王の事績をもとにして概観したのだが、ここでは蛇の頭を主字とする紋章文字（以降、便宜上蛇頭紋章文字と呼ぶ）（図

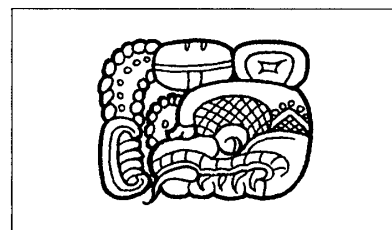


図1 蛇頭紋章文字
(Coe and Stone 2001:70 より)

1) を持つ王朝と、現在カラクムルと呼ばれている巨大遺跡を首都とする王国を支配していた勢力が、同一であることを前提としていた。

しかしながら、近年この考えに対して、異論が唱えられるようになった。その嚆矢となったのが、マーティンSimon Martinが2005年にThe PARI Journalの第2巻第2号に発表した論文'Of Snakes and Bats : Shifting Identities at Calakmul.'である。マーティンは同論文で、カラクムルにおいて、蛇頭紋章文字で表わされた王朝とコウモリの頭を主字とする紋章文字（以降、コウモリ紋章文字と呼ぶ）を持つ別の未知の王朝との間で「王朝交替」があった可能性を示唆しているのである。本稿では、同論文を批判的に検討することで、果たしてカラクムルで実際に「王朝交替」があったのか、そしてその一方の主役としてコウモリ紋章文字を持つ王朝が想定できるのか、という点について考察してみたい。

2、カラクムル遺跡について

カラクムル遺跡は、メキシコのユカタン半島のカンペチェ州の東端、グアテマラとの国境から約35kmの所に位置している（図2）。面積30km²以上の範囲に6250もの多数の建築物が分布しており、マヤ地域でも最大規模の巨大遺跡である（Braswell et al. 2004:167）。1000年以上にもわたって人々が居住し続けたという歴史上の重要性から、2002年にはユネスコ世界遺産の文化遺産にも登録されている。

事実、現在カラクムル遺跡がある場所に人々が居住を開始したのは、先古典期中期に遡る（Folan et al. 1995 : 316）。先古典期後期には、規模の点では古典期後期のティカルやカラクムルをも凌駕する巨大都市に成長したエル・ミラドールEl Miradorと密接な関係があったであろうことは、カラクムルとエル・ミラドールがサクベsacbeで結ばれていたことから窺える（Folan et al. 1995

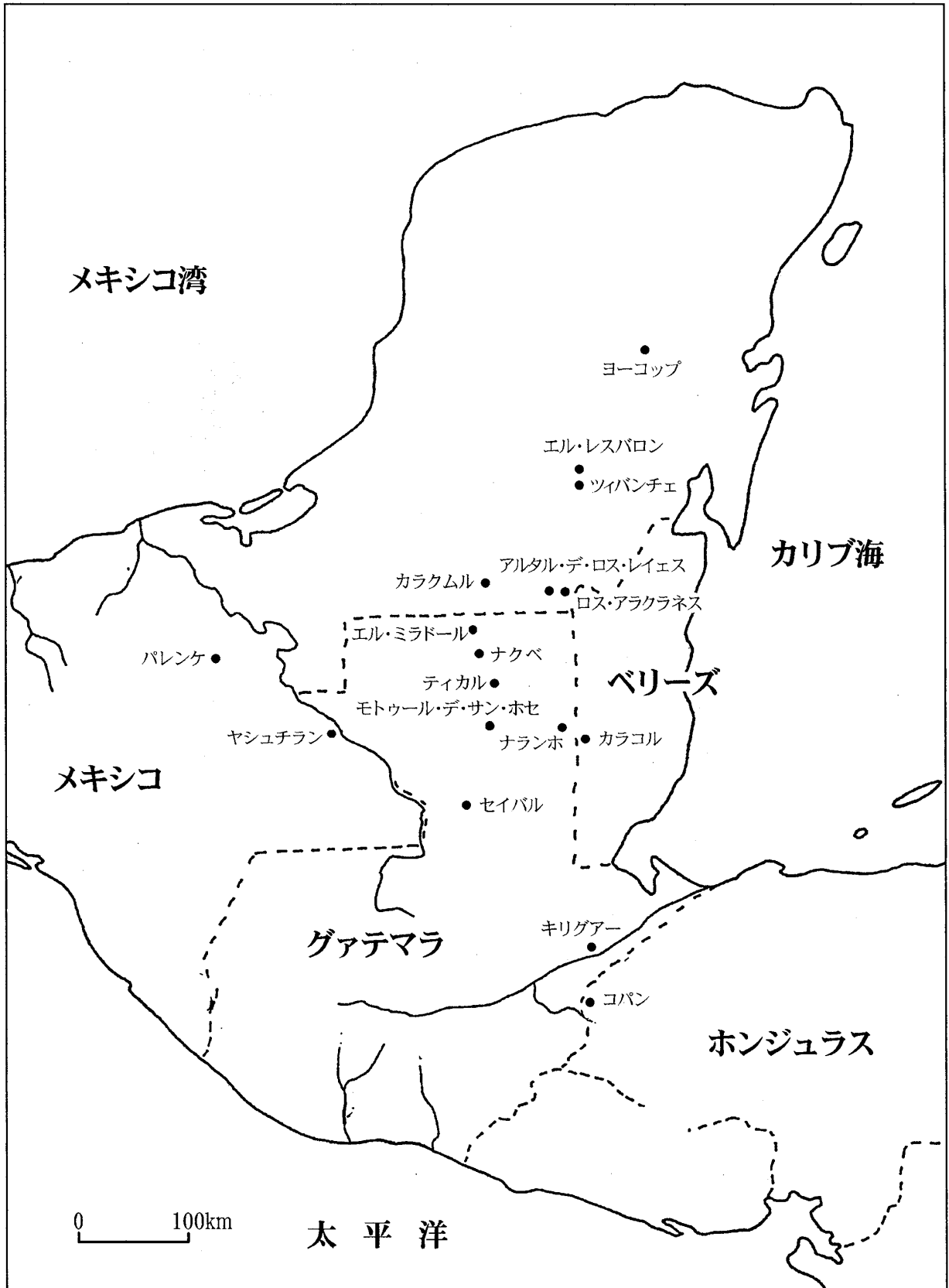


図2 マヤ地域

: 311; Sharer 2006 : 252)。両都市の関係を示唆するもう一つの事柄として、カラクムル最大の建物である建築物Ⅱが、エル・ミラドールでも最大規模の建築コンプレックスであるエル・ティグレEl Tigreグループと、規模や形態の点で酷似していることが挙げられる。しかも、この建築物Ⅱは先古典期後期に建築が始まり、この時期に既に階段状の基壇の高さは現在の高さ(55m)に達していたのである。このことからわかるように、カラクムルには、蛇頭紋章文字が現われるようになる以前に、既にかなり強力な勢力によって政体が確立されていたと考えられるのである。実際に王朝がいつ頃成立したかは明らかになっていないが、遅くとも古典期前期には王国としての体をなしていたと考えられる。そして古典期の最盛期には13000km²もの広大な領域を支配し、175万人もの人口を擁する「超大国」に成長したようである(Braswell et al. 2004:162・171; Folan et al. 2001:227)。他国で蛇頭紋章文字が言及される頻度や地理的範囲も、古典期の他のどの王国をも凌いでおり、このことからこの王国の強盛振りが窺われる。

ただ問題なのは、蛇頭紋章文字は、他の遺跡では古典期前期のモニュメントに既に刻まれているにもかかわらず、カラクムル自体では古典期後期に入らなければ生起しないのである。ここから、蛇頭紋章文字で表わされる勢力が、果たして先古典期から一貫してカラクムルを根拠地にしていただろうか、という疑問が生じるのである。換言すれば、かつてはカラクムル以外の地が首都だったのが、後に現在のカラクムル遷都したのではないか、というわけである。この点について、次章で検討していくことにしたい。なお、煩雑を避けるため、現マヤ語で蛇を意味する語がカーンKaanなので、蛇頭紋章文字を有する国家ないし王朝の名称をカーンと呼ぶことにしておく。

3、古典期前期のカーン王

カーン王が言及された最古の例は、ツイバンチェ Dzibanchéの「捕虜の建物」に附設された階段に刻まれた碑文に見られる。このモニュメント15に、蛇頭紋章文字が、9.1.16.2.15 10メンmen 8シュルxul (471年7月29日)、あるいは9.2.9.6.0 10アハウajaw 8シュル (484年7月25日)の日付と共に生起しているのである(Verazques García 2004:82)。同時期に刻まれたと見られるモニュメント11に、ユクヌーム・チェーンYuknoom Ch'eenの名が生起しているので、この碑文はユクヌーム・チェーン1世の事績について記されているものと考えられる。

ツイバンチェに蛇頭紋章文字が初めて生起した後も、カーン王朝の活発な対外活動の痕跡は、各地の碑文から確かめられる。たとえば、ヤシュチランYaxchilanの建物12のリンテル35の碑文は、カーン王カルトゥーン・ヒシュ K'altuun Hixの一臣下が、9.5.2.10.6 (537年1月16日)に同地で催された儀式に参加している(Schele and Freidel 1990:175)。また、ナランホNaranjoの石碑25によると、9.5.12.0.4 6カンkan 3シップsip (546年5月5日)に催されたナランホ王アフ・ウォサルAj Wosalの即位の儀式を、カルトゥーン・ヒシュが主宰している(Carrasco 2000:17; Martin and Grube 2000:72)。カルトゥーン・ヒシュを襲った「空の証人」Sky Witness王も、572年にカラコルCaracolとの同盟を強化したことが、同地の石碑3に記されている(Carrasco

1998:382,2000:17)。ロス・アラクラネスLos Alacranesの石碑1によると、彼はまた561年に同地のサック・バーフ・ウィツィルSak B'ahh Witzilが王位に即く際に後援している (Grube 2004:35; Spraj 2007:79)。彼の名は、エル・レスバロンEl Resbalonの碑銘の階段やヨーコップYo'okopの「石B」にも生起している (Martin 2000:43; Wren, L. et al.:92)。ヨーコップのテキストからは、彼が同地の支配者だったことが推察される。蛇頭紋章文字が初めて生起したツイバンチェでは、別の王の名も刻まれている。ヤシュ?・ヨアートYax?-Yo'aat (あるいはヨパートYopaat) というこの人物は、9.7.0.0.0 7アハウ3カンキン kankin (573年12月5日) のカトゥン完了を祝ったとして、その名が言及されている^① (Martin and Grube 2000:104; Verasquez García 2004:97; Martin 2005:6)。更に、パレンケPalenqueの「碑銘の階段」の東パネルのテキストによると、「渦巻き蛇」Scroll Serpent王は同国に対して599年と611年の二度にわたって遠征を行っている (Martin and Grube 2000:159-160)。カラコルの石碑3には、9.9.5.13.8 4ラマツlamat 6パシュpax (619年1月9日) に、カラコル王カンK'an 2世が行った何らかの行為に関連して、「渦巻き蛇」王を継いだユクヌーム・チャンYuknoom Chanの名が言及されている (Folan et al. 1995:326; Schele and Freidel 1990:174)。最後に、次の王タフーム・ウカブ・カックTajoom Uk'ab' K'ak'の名が、ナランホの「碑銘の階段」の階段6のテキストに現れている。

このように、6世紀以降に限っても、約100年の間にカルトゥーン・ヒシュに始まって、「空の証人」、ヤシュ・ヨアート、「渦巻き蛇」、ユクヌーム・チャン、タフーム・ウカブ・カックと、少なくとも6人がカーン王として他国で言及されているのである。彼らは他国と同盟関係を結んだり、あるいは攻撃したりと、活発な外交戦略を展開していることも判明している。にもかかわらず、この時期のカラクムルのモニュメントには蛇頭紋章文字は完全に欠如しており、先述した諸王について黙して語らないのである。これらの諸事情を勘案すると、古典期前期にカーン王朝がカラクムルに盤踞していたと想定するのは、極めて困難だと言わざるを得ない。では、この当時のカラクムルは、どのような状況にあったのであろうか。

4、古典期前期のカラクムルのモニュメント

カラクムルでは120近い石碑が建立されたのだが、古典期前期に建てられたのは、石碑114と石碑43の僅か二つに過ぎない。石碑114は、先述した建築物Ⅱの基部の壁龕に据え付けられたもので、正面に王と見られる着飾った人物の肖像、残る三面に文字が刻まれている。裏面のテキストは、長期計算法による8.19.15.12.13 8ベンben 6モル mol (431年9月15日) の日付で始まっており、この長い碑文中に、"chi-ku-NAHB AJAW"「チーク・ナーブの王」という文字句が生起している (Pincemin et al. 1998 : 318 Figure 7; Grube 2004b : 121; Martin 2005 : 10)。これは、「チーク・ナーブの王」という称号の最初の生起例なのだが、その代りこの碑文には蛇頭紋章文字は生起していない^②。

また、同じく建築物Ⅱで見つかった石碑43には、両側面に文字が刻まれており、その中に9.4.0.0.0

13アハウ 18ヤシュ yax (514年10月16日) という日付が見出される。この碑文の主役となる人物は、アフ・クフ・ビフ?・ア AJ-K'UH-BIH?-aという現在のところ未知の人物なのだが (Martin 2004: 6)、この人物は「クフル・チャタフン・ウィニク」"k'uhul chatahn winik"[®]という称号を伴っているのみである。ここでも、蛇頭紋章文字は欠如している (Martin and Grube 2000: 103; Verazques García 2004: 註6, 2005: 2)。

このように、古典期前期に建立された石碑114と石碑43のいずれにも、素性は不明ながら、支配者らしき人物が彫られ、後者に関してはカトゥン完了を記念したモニュメントとして建立されていると考えられることから、この当時のカラクムルに何らかの政体が確立されていたことは疑いがない。問題は、彼らがカーン王朝に属す人々なのか、あるいは全く別の勢力を構成していた人々なのか、ということである。

5、蛇頭紋章文字とコウモリ紋章文字

ツィバンチェに初出し、その後各地のモニュメントに生起する蛇頭紋章文字を称号として伴う王を戴く国家をカーン王国と規定した。逆に言うと、蛇頭紋章文字を伴わない人物は、カーン王朝と関係があるとは認めがたいということである。

マーティンが石碑114に生起しているというコウモリ紋章文字だが、彼がコウモリであると主張する主字自体、三つの点で疑わしいと考えられる。先ず一つは、1998年に *Latin American Antiquity* 誌に掲載されたピンスミン Sophia Pincemin による模写との違いが余りにも大きいという点である (図3)。これは、この文字の磨滅が激しいせいで復元が難しく、見る者によってかなり違って見えるということの意味する。このことは、接字についても言える。本来の紋章文字であれば、主字の左側に、「神聖な」を意味する表語文字であり、水滴あるいは数珠の連りのようなクフル kuhul という前接字、また上接字としてアハウの表語文字が来るのだが (図4)、ピンスミンはもちろんのこと、マーティン

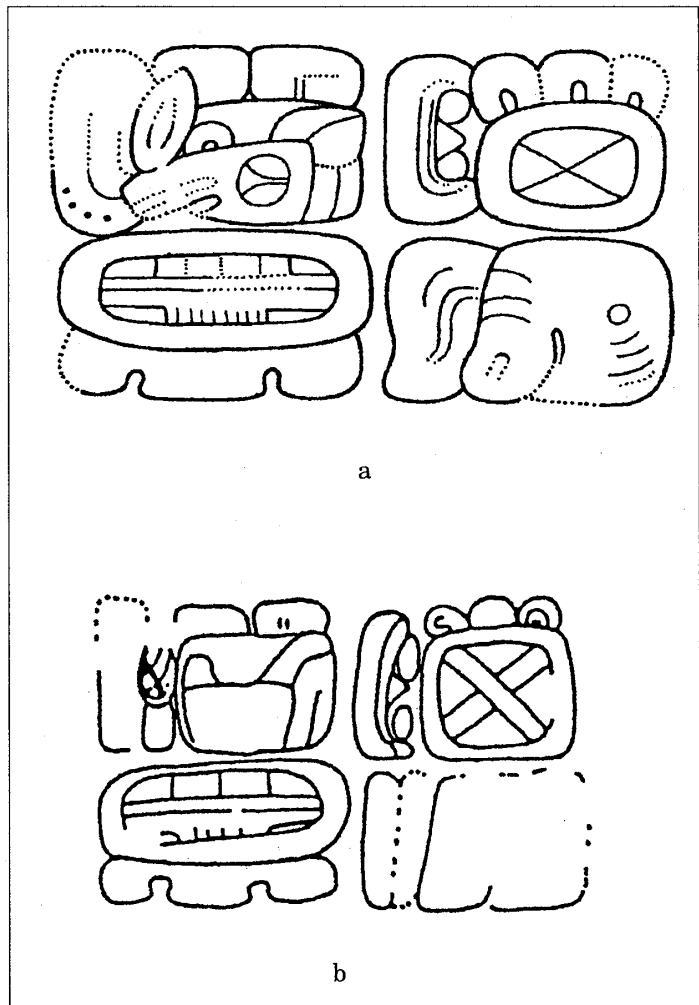


図3 石碑114の「コウモリ紋章文字」(C5-D6)
(aはMartin 2005:9 Fig.5, bはPincemin et al. 1998 Figure7 より)

ンの模写に描かれた文字も、これらの接字であるようには思えない。第二に、仮にマーティンによる模写の方が元々刻まれていた文字に近いとしても、コウモリを表しているにしては余りにも抽象的過ぎ、これをコウモリと解釈するかどうかとも見る者によるだろう。更に言えば、具象的に描かれた図が抽象的になっていくというのは一般的によく見られる現象であるが、最初に抽象的に描かれたものが後に具象化するというのは異例であろう。三つ目は、この文字が仮にマーティンが復元した通りだとしても、この文字

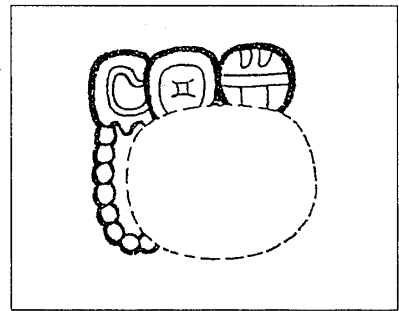


図4 紋章文字の模式図
(Coe and Stuart 2001:69 より)

の生起例は、石碑114のこの個所にしかないということである。これらのことから、古典期前期にコウモリを紋章文字とする政治勢力が存在して、カラクムルを本拠地としていたとする説は、根拠が薄弱であると言える。

次に、石碑62と石碑59に生起している文字だが、これは一見してコウモリをかたどった文字だとわかる(図5)。接字に関しても、前接字はクフル、上接字はアハウであることは間違いないであろう。つまり、この文字は明らかにコウモリの頭部を主字とする紋章文字である。しかし、だからと言って、この紋章文字をカーン王朝とは異なる未知の政治勢力と結びつけるのは早計であろう。

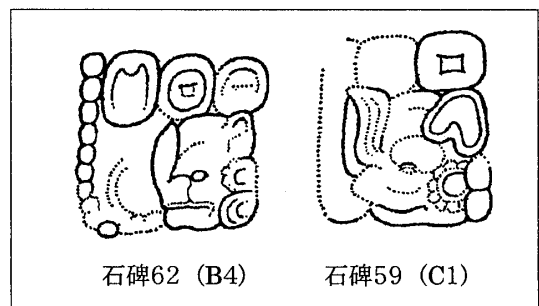


図5 カラクムルの石碑62と石碑59のコウモリ紋章文字 (Martin 2005:9 Fig.6 より)

コウモリを主字とする紋章文字で想起するのは、コパンCopanの紋章文字である。もちろん、マーティンも石碑62のコウモリ紋章文字とコパンの紋章文字の類似に言及しているのだが、後者に見られる「ピ」piやあるいは「プ」puといった接尾字が欠如しているとの理由で、その可能性を退けている。しかし、これもマーティン自身も指摘しているように、このコウモリ紋章文字が生起する時期は、マヤ低地南部南東部の政治情勢が緊迫していた時期に当たるのである。このことを考慮に入れると、この紋章文字とコパンとの関係について安易に否定しない方が良いと思われる。つまり、このコウモリ紋章文字が生起する石碑の日付を見ると、石碑62の場合が751年、石碑59の場合が741年と、いずれもコパンとキリグアーQuiriguaとの間に戦争が起こった738年のすぐ後なのである。しかもこの戦争、より正確に言えば、コパンに対する従属国キリグアーの反乱に関しては、カラクムルが何らかの形で関与していたかも知れないのである。と言うのも、キリグアー王カック・ティリウ・チャン・ヨアートK'ak' Tiliw Chan Yoaatが800年に建立した石碑Iの碑文に、736年の日付と共に、ワマウ・カウィールWamaw K'awiilの名が「チーク・ナーブの神聖王」という称号を伴って言及されているからである (Martin and Grube 2000:114; Martin 2005:10; Tunesi 2007:15-16)。「チーク・ナーブの神聖王」という称号は、先述したように、カラクムルの二つのテキストに生起した称号であった。チーク・ナーブとは、現在カラクムル遺跡がある場所の地名だっ

たと考えられるので、この称号はカラクムル王を指していると思われる^④。このテキストで、ワマウ・カウィールがカーン王国の王であるにもかかわらず、なぜ蛇頭紋章文字を伴っていないかはわからない。と言うのも、二人の着飾った人物が球技をしていると見られる光景が描かれている個人像の「球技者パネル」に、

u-baah Wamaaw K'awiil, K'uhul Kanal Ajaw, Kaloomte'

すなわち、「カーンの神聖王ワマウ・カウィールの肖像；彼はカロームテなり」というテキストが刻まれているからである (Tunesi 2007:15)。この碑文から、ワマウ・カウィールがカーン王であるのみならず、古典期マヤ社会において、ティカルのような超大国の王だけが持つことが出来るカロームテという地位にあった (少なくとも、そう称していた) ことがわかる。

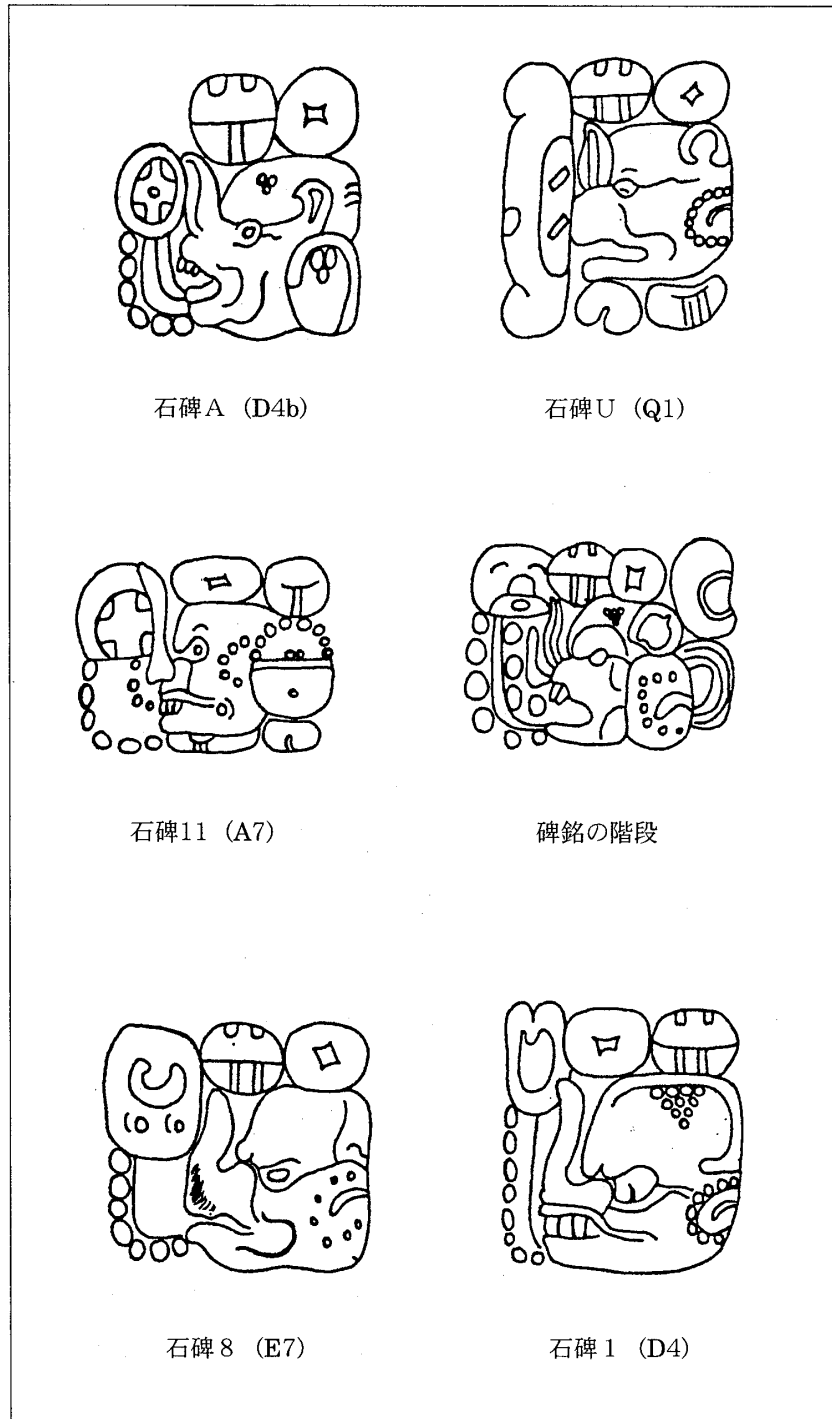
いずれにしても、キリグアアの碑文から、736年当時のカラクムル王 (カーン王) が、キリグアアで起こった何らかの出来事に関与していたことが窺える。その2年後の738年が、キリグアアにとって宗主国であったコパンに対し反旗を翻して勝利し、コパン王ワシャクラフーン・ウバーフ・カウィールWaxaklajuun Ub'aah K'awiilを処刑した記念すべき年であったことを考慮に入れると、この反乱にワマウ・カウィールが何らかの形でかかわっていたことは十分考えられる。また、ワシャクラフーン・ウバーフ・カウィールは9.15.0.0.0 (731年8月20日) のカトゥン完了を記念して石碑Aを建立しているのだが、この石碑の表面には、コパンやカーン王国、更にはティカルやパレンケの紋章文字が、東西南北を表す文字と共に刻まれている。恐らく、これらの国々は、当時のマヤ人にとってマヤ地域を四分する大国と認識されていたのであろう。当然これらの国々も、お互いの存在を強く意識していたであろう。従って、遠国とはいえ、互いの紋章文字を言及し合う可能性は多分にあるであろう。

また、当時のカラクムルを取り巻く情勢を見ると、ティカル王ハサウ・チャン・カウィールJasaw Chan K'awiilに敗北を喫して以降も、暫くの間は一定の勢力を保っていたものの、734年に再びティカルに大敗する。その後、743年にエル・ペルー El Peru、744年にナランホと、カラクムルの同盟国が次々にティカル王イキン・チャン・カウィールYik'in Chan K'awiilの攻撃を受けるなど、カラクムルの勢力圏は弱体化しつつあったのである。従って、736年にキリグアアと何らかの関係を結び、コパンへの反乱に与することは、衰退しつつあったカラクムルにとってはいわゆる遠交近攻の戦略となり、カラクムルに利すると考えられるのである。というのも、コパン王国の建国者キニチ・ヤシュ・クック・モK'inich Yax K'uk' Mo'は、ティカル出身か、あるいは少なくともティカルと何らかの関係を持っていた可能性があるからであり (佐藤 2005b)、だとするとコパンの弱体化はティカルに対して間接的に打撃を与えることができると企んだかも知れないからである。このように、コウモリ紋章文字が現れるようになった時期がティカルとの関係が緊迫化していた時期であることも考慮に入れると、コウモリ紋章文字をコパンの紋章文字と結び付ける余地は十分あると思われる。

また、少数ではあるが、パレンケやヤシュチランのように複数の紋章文字を持つ国家もあるし、

コパンの紋章文字に関して様々な形態のものがあり、細部は必ずしも一様ではない(図6)。いずれにしても、キリグアーのモニュメントでカラクムル王と思われる人物が言及されたのとほぼ同時期に、コパンのモニュメントに蛇頭紋章文字が生起していることは、無関係とは思えない。従って、736年以降蛇頭紋章文字の生起が急減することをもって、カーン王朝がカラクムルから追放された可能性を示唆するマーティンの見解には与し得ない(Martin 2005:12)。

マーティンは、石碑62と石碑59にコパンの紋章文字とは別個の「コウモリ紋章文字」が生起していることを根拠に、カーン王朝と「コウモリ紋章文字」を持つ未知の勢力との間に「王朝交替」



が起こったかも知れないとしている。しかし、その後もカラクムルを基盤とするカーン王は存在している。たとえば、10.1.0.0.0 (849年11月28日)のカトゥン完了を祝って建立されたセイバルSeibalの石碑10には、セイバル、ティカル、モトゥール・デ・サン・ホセMotul de San Joseの王と共に、チャン・ペットChan Petという名の人物がカーン王として言及されている(Schele and Mathews 1998:184-187; Martin and Grube 2000:115)。更に、恐らくは10.4.0.0.0 (909年1月18日)のカトゥン完了記念のモニュメントであるカラクムルの石碑61には(Sharer 2006:415)、建立を命じたアフ・トークAj Took'王の肖像と蛇頭紋章文字が刻まれている(Carrasco 2000:13)。このように、蛇頭紋章文字は決してマヤ地域から消滅していないし、カラクムル自体でも

図6 コパンの紋章文字 (Marcus 1976:123 Fig.437 より)

10世紀に入るまで見られるのである。このことから、カーン王国がカラクムルから姿を消したと即断することは出来ない。

6、おわりに カーン王朝とカラクムル

蛇頭紋章文字が初めて生起するモニュメントはツイバンチェの階段であり、5世紀後半のことであった。従って、少なくともこの頃までにはカーン王国が成立していたと考えられる。しかしながら、カーン王の中でカラクムルとの関連が確認出来る最古の王はユクヌーム「頭」Head王である。ナランホの碑銘の階段の階段6のテキストに、

u-kabiji yuk[noom] [?] kanal ajaw ta huxte'tuun aj chi'k nahb

すなわち、「ウシュテトゥーンのカーン王、チーク・ナーブ出身のユクヌーム「頭」がそれを命じた」と記されている (Tokovinine 2007 19-20)。このことから、ユクヌーム「頭」王はチーク・ナーブ、すなわちカラクムルを拠点としたカーン国王であったと考えられる。逆に言うと、彼以前のカーン王がカラクムルを拠点にしていたとする確実な根拠はない。しかも、古典期前期には二つの石碑しか建てられなかったカラクムルで、石碑建立が顕著に増加するのも彼の治世の頃からである。このことから考えても、カーン王朝はこの頃からカラクムルを国家の首都とするようになったのかも知れない。ただ、古典期後期に入り、109年振りにカラクムルで石碑を建立したのはユクヌーム「頭」王の前王であるタフーム・ウカブ・カックであり、彼は623年に石碑28と石碑29を建てている (Folan et al. 1995:327)。表面の摩滅が激しく、蛇頭紋章文字も見つかっていないため、彼がカーン王であったかどうかはわからないが、109年振りに石碑を建立するという重要な行為を為しているという事実を鑑みると、その可能性も必ずしも否定出来ないと思われる。

ユクヌーム「頭」王に続き、大王とも綽名されるユクヌーム・チェーン2世が即位し、カラクムルは全盛期を迎える。その後、空白期は存在するが、低地南部の古典期社会が衰亡する古典期終末期まで、カーン王国はカラクムルを中心として存続していたと考えられる。

古典期前期、すなわち蛇頭紋章文字が現われる以前のカラクムルを支配していた勢力がどのようなものであったかを確言することはできない。先にも述べた通り、私は「コウモリ紋章文字」を持つという未知の勢力の存在には懐疑的である。むしろ、古典期前期のカラクムルもカーン王朝とかかわりのある都市だったのではないかと推測している。それは、古典期前期に建立されたただ二つの石碑が、古典期後期に建築物Ⅱというカラクムルでも最大規模の建物に再設置され、決して粗略に扱われていないからである。このことは、これらの石碑を建てた勢力とカーン王朝が敵対的な関係になかったことを示しているように思われるのである。

本稿では、マーティンのいう「コウモリ紋章文字」を有する勢力がカーン王朝とは別個に存在し、両者の間でカラクムルの支配をめぐる争いがあり、結果的に「王朝交替」があったとする説には否定的な立場で論を進めてきた。ここで最後に、仮にコウモリ紋章文字が現在まだ知られていない国家（仮に、「コウモリ国」と呼ぶ）のものであると仮定して考えてみよう。もしそうだとすると、

この「コウモリ国」はカラクムルに「コウモリ紋章文字」が生起している間はカラクムルに拠点を置いていて、それ以外の時期には他の場所に拠っていたことになるが、一体そこはどこであろうか。石碑114に生起している文字を「コウモリ紋章文字」と同定するなら、古典期前期に一旦カラクムルに本拠を置いた何らかの勢力が、暫くの間カーン王朝に追放されて他地域に避難し、数世紀後に再びカラクムルに戻ったことになる。この間「コウモリ国」はどこに存在したのだろうか。また、なぜこの間どこにも「コウモリ紋章文字」が見られないのだろうか。また、石碑62や石碑59の紋章文字のみを「コウモリ紋章文字」と認めるとすると、8世紀になって突然どこからか「コウモリ紋章文字」を持つ未知の勢力がカラクムルに侵入し、カーン王朝に取って替わったことになる。いずれにしても、カラクムルのような大都市を攻略するような勢力が他の地域にいて、しかもその存在が今現在同定できていないことになる。しかも、それだけ強力な勢力であるにもかかわらず、紋章文字はカラクムルの8世紀以降のモニュメントにしか生起していないことになる。これは極めて不自然な状況であると言わざるを得ない。

「コウモリ紋章文字」を有する「コウモリ国」が実在し、カラクムルをめぐってカーン王朝と争ったと主張するならば、カラクムルを去っていた間この勢力がどこに居を構えていたかを解明する必要がある。それまでは、「コウモリ紋章文字」をコパンと結び付けて考え、カラクムルの碑文上での生起を古典期マヤ南東部の緊迫した政治状況の反映と推測するのもあながち妄説とは言えない。

註

- ①この王は、一般には「最初に斧を振るう者」First Axewielderという仮称で知られている。
- ②「チーク・ナーブの王」という称号が生起しているテキストは、カラクムルには二例ある。もう一つは、建物13の残骸から取り出された碑文のブロックのテキストの中で、ここでは751年の日付と共に、ボロン・カウィールBolon K'awiilという人物がこの称号を伴って言及されている(Martin 2005:10-11; Tunesi 2007:16註2)。
- ③チャタフン・ウィニクChatahn (あるいはチャタンChatan) Winikすなわち「チャタフンの聖なる人」という文字は、他にもエル・ミラドール近郊のアルタル・デ・ロス・レイェスAltar de los Reyesで見つかった祭壇³や、いわゆるコデックス様式の土器で見出されている。このチャタフンが何を意味するかについては、ナクベNakbeやエル・ミラドールのような起源の古い国家を指すのではないかとの説もあるが、現在のところ不明である(Sharer 2006:261)。
- ④チーク・ナーブについては、佐藤(2008)を参照。

引用文献

- Braswell, Geoffrey E., Joel D. Gunn, María del Rosario Dominguez Carrasco, William J. Folan, Laraine A. Fletcher, Abel Morales López, and Michael D. Glascock
2004 'Defining Terminal Classic at Calakmul, Campeche.' In *The Terminal Classic in the Maya Lowlands: Collapse, Transition, and Transformation*, eds. Demarest, Arthur A., Prudence M. Rice, and Don S. Rice, pp.162-194. University Press of Colorado, Boulder.
- Carrasco Valgas, Ramón
1998 'The Metropolis of Calakmul, Campeche.' In *Maya*, eds. Schmidt, Peter, Mercedes de la Garza and Enrique Nalda, pp.372-385. Rizzoli International Publications, Inc., New York.
- Carrasco Valgas, Ramón
2000 El cuchcabal de la Cabeza de Serpiente. *Arqueología Mexicana* 42, pp. 12-19.
- Coe, Michael D. and Mark Van Stone
2001 *Reading the Maya Glyphs*. Thames and Hudson Ltd, London.
- Folan, William J., Joyce Marcus, Sophia Pincemin, María del Rosario Dominguez Carrasco, Laraine Fletcher, and Abel Morales López
1995 Calakmul: New Data from an Ancient Maya Capital in Campeche, Mexico. *Latin American Antiquity*, vol. 6, No. 4, pp.310-334.
- Folan, William J., Joel D. Gunn, María del Rosario Dominguez Carrasco
2001 'Triadic Temples, Central Plazas and Dynastic Palaces: A Diachronic Analysis of the Royal Court Complex, Calakmul, Campeche, Mexico.' In *Royal Court of the Ancient Maya, Volume Two: Data and Case Studies*, eds. Inomata, Takeshi and Stephen D. Houston, pp.223-265. A Westview Press, Boulder.
- Grube, Nikolai
2004a Ciudades perdidas mayas. *Arqueología Mexicana*, vol.XII, num.67, pp.32-37.
- Grube, Nikolai
2004b El origen de la dinastía Kaan. In *Los Cautivos de Dzibanché*, ed.Nalda, Enrique, pp.117-131. Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- Marcus, Joyce
1976 *Emblem and State in the Classic Maya Lowlands : An Epigraphic Approach to Territorial Organization*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.
- Martin, Simon
2000 Los señores de Calakmul. *Arqueología Mexicana* 42, pp.40-45.
- Martin, Simon
2005 Of Snakes and Bats : Shifting Identities at Calakmul. *The PARI Journal*, vol. VI , no.2,

pp.5-15.

Martin, Simon and Nikolai Grube

2000 *Chronicle of the Maya Kings and Queens : Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*, Thames and Hudson Ltd, London.

Pincemin, Sophia, Joyce Marcus, Lynda Florey Folan, William J. Folan, María del Rosario Dominguez Carrasco and Abel Morales López

1998 *Extending the Calakmul Dynasty Back in Time : A New Stela from a Maya Capital in Campeche, Mexico*. *Latin American Antiquity*, vol. 9, No. 4, pp.310-327.

Schele, Linda and David Freidel

1990 *A Forest of Kings : The Untold History of the Ancient Maya*. William Morrow and Co., New York.

Schele, Linda and Peter Mathews

1998 *The Code of Kings : The Language of Seven Sacred Maya Temples and Tombs*, Scribner, New York.

Sharer, Robert J. with Loa P. Traxler

2006 *The Ancient Maya*, 6th ed., Stanford University Press, Stanford.

Sprajc, Ivan

2007 *Exploraciones recientes en el sureste de Campeche*. *Arqueología Mexicana*, Vol.XV, num.86, pp.74-80.

Tokovinine, Alexandre

2007 *Of Snake Kings and Cannibals : A Fresh Look at the Naranjo Hieroglyphic Stairways*. *The PARI Journal*, vol.VII, no.4, pp.15-22.

Tunesi, Raphael

2007 *A New Monument Mentioning Wamaaw K'awiil of Calakmul*. *The PARI Journal*, vol.VIII, no.2, pp.13-19.

Verazques García, Erik

2004 *Los escalones jeroglíficos de Dzibanché*. In *Los Cautivos de Dzibanché*, ed.Nalda, Enrique, pp.79-103. Instituto Nacional de Antropología e Historia.

Wren, Linnea, Travis Nygard, and Ruth Krochock

'Monuments of Yo'okop.' In *Final Report of The Selz Foundation's Proyecto Arqueológico Yo'okop 2001 Field Season : Excavations and Continued Mapping*, ed. Shaw, Justine M., pp.80-104. College of the Redwoods, Eureka. http://online.redwoods.cc.ca.us/yookop/Yok_2001_report_text&figs.pdf

佐藤孝裕

2005a 「「蛇の王国」カラクムルー古典期マヤ社会のパワー・ポリティクスー」『史学論叢』第36号、1-17頁。

2005b 「キニチ・ヤシュ・クック・モのコパン建国とテオティワカン」、貞末堯司（編）『マヤとインカ 王権の成立と展開』、75-92頁、同成社。

2008 「古典期前期におけるカーン王朝の本拠地の所在についての一考察ーツイバンチェの碑文の分析からー」『別府大学大学院紀要』第10号。